

昨年の増上寺七夕まつりの模様。鐘楼堂前にはキャンドルの天の川



東北への願い込め境内に
1300のキャンドルで天の川

7月1日～7日

増上寺で七夕まつり

大本山増上寺（東京都港区）境内は7月に入ると、様々な願いが書かれた色とりどりの短冊が風にゆられます。笹の葉とともにサラサラと、風流で見た目にも涼しげです。7日夕刻には七夕まつりが開かれますが、中でも和紙キャンドルで表現される天の川は来場者の注目の的となります。今回はそのキャンドルを演出する東京都多摩市にある多摩大学の村山貞幸教授のお話も交え、「増上寺七夕まつり」を紹介します。

七夕は仏教行事？

七夕と言えば、織姫と彦星が天の川で再会を果たす、というロマンティックな説話が有名ですが、実は仏教ともかかわりが深いとも言われています。

お盆は旧暦の7月15日を

中心に行われますが、その前の7日はお盆にご先祖さまを迎えるための精霊棚と幡の準備をする日ということから「棚幡」と呼ばれ、7日の夕方からその準備を始めたところから「七夕」を「たなばた」と呼ぶようになったと言われています。

また、「笹の葉さらさら」の歌い出しで知られる童謡「七夕さま」の2番は「五色の短冊」で始まりますが、この短冊も施餓鬼会で餓鬼棚の上に掛けられる5色の幡（五如来）や、和紙で作られる小型の施餓鬼幡がその原型ではないかといわれています。

このように、七夕には仏教の要素も含まれているようですが、その起源はお盆の他にも、豊作を先祖に祈る日本古来の風習や、中国から伝えられた、女性が針仕事の上達を願う「乞巧奠」なども指摘されており、様々な文化が習合した行事といえるのです。七夕を一概に仏教行事と言い切るのははばかられますが、先祖を思いやる人々の願いが込められ、続けられてきた大切な文化であることは忘れてはいけません。

日本大好きプロジェクト

「そこ、もっと真っ直ぐー！」
6月5日午後。増上寺の境内に学生たちの声が響きました。この日は「天の川」の制作、演出をする多摩大



学・村山ゼミの学生が本番に向けてリハーサルを行っています。長いロープを使いキャンドルを川の曲線に合わせて見事に並べていきます。

演出は今年で3回目ですが、このゼミで取り組んでいるのが「日本大好きプロジェクト」。多くの人に日本の伝統文化に触れてもらい、心から日本を好きになってほしいと、平成20年から村山教授が始めたもので、これまでにも、増上寺七夕まつりのような集客型イベントで一般に伝えてきたほか、紙すき体験、茶道、紙芝居など様々な伝統文化を幼稚園などへ出向き子どもたちへ伝えていきます。今回キャンドルに使用される和紙も、4月8日に同寺で開かれた「法然さまをたたえるよいこのつどい」でゼミ生と子どもたちが一緒に漉いたもので、その紙に子どもたちが東日本大震災の被災地へ向けたメッセージを書きました。

指導する村山教授は「日本の伝統文化という少し堅い印象がありますが、機会が少ないだけで、一般の人たちもどこか興味を持っているんですよ。それを若



4月8日、よいこのつどいで紙すきをするゼミ生と子ども(写真上) 和紙に東北へのメッセージを書く子ども(写真下)

い学生が伝えていくことに意味があると思いますし、それぞれの文化には長い歴史と意味があり、なくなっ てはいけないものばかりです。七夕やお寺も同様。このイベントは、近代の象徴である東京タワーを背景に長い歴史を持つ増上寺さんで開かれます。その中で伝統文化の魅力を学生たちがどう引き出すのかを楽しみに、皆さんに足を運んでいただきたい」と語る。

お盆の始まりを知らせ、江戸時代にはすでに短冊に願いを込める慣習があったという七夕。増上寺で学生たちが表現する伝統文化の魅力に触れてみてはいかがでしょうか。

増上寺 七夕まつり

1日から境内に短冊書き込み所を設置。7月7日、午後5時から境内で縁日、コンサートが予定されるほか、日没からはキャンドルが灯され、節電にも一役。また、当日の収益は「あしなが育英会」に寄付され、震災によって親を亡くした子どもたちのために使われる。